

1. そこで、ピラトはもう一度官邸にはいって、イエスを呼んで言った。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」イエスは答えられた。「あなたは、自分でそのことを言っているのですか。それともほかの人が、あなたにわたしのことを話したのですか。」ピラトは答えた。「私はユダヤ人ではないでしょう。あなたの同国人と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのです。あなたは何をしたのですか。」 (18:33-35)
 - a. イエスの裁判は終盤にさしかかった。ユダヤ人たちはイエスを「法的に(31節)」殺すためにピラトのもとに連れて来て死刑を言い渡すように願う。(注；「法的に」とはローマの律法による、ということであり、神の律法に従うということではない。ユダヤの律法では刑罰を与えることは認められていたが、ローマの支配下にあったため石打ちに処することは認められていなかった。)
 - b. ピラトはこの状況を把握できていない様子で、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしている理由を知るためにイエスに尋問をする。ピラトはここで公正な判断をしようと正しいことをしているが、イエスは彼の質問はすでに他の人から聞いていることであり、真理とは違う方向へ導かれていると指摘される。
 - c. 私たちの人生においても、私たちの考え方が誰によって、どんなものによって影響されているかを知ることが大切である。私たちは常にさまざまな情報を浴びせられ多かれ少なかれその影響を受けている。イエスはわずかのパン種がこねた粉の全体に作用するので、パリサイ人やサドカイ人のパン種には気を付けるようにとおっしゃった(マタイ 16:6)。
2. イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」。(18:36)
 - a. イエスは王であることを否定はされないが、彼の王国はこの世のものではない。地理的にはイエスの王国はアメリカでも地球上のどこでもなく、天にある。現実的にはイエスの王国はこの世の王国のように機能しない。それはどちらの軍隊が強いとか、より兵力があるとか、優れた戦略を持っているか、とかいう基準ではない。それは神の御心に基づいている。天使が来てイエスを助けられなかったわけではない。天の御国は権威や強制や反応によってではなく、神の御心によって動くものである。
 - b. 私たちがこの世で生きる時も天の御国の原則や価値観に沿うべきで、争い合ったり、操作されたり、権力争いの中に生きるべきではない。私たちはこの世にあってこの世のものではない(ヨハネ 17:16)。
3. そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりで。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属するものはみな、わたしの声に聞き従います。」(18:37)
 - a. これら偽りの罪状書き、誤った情報、半端な真実の中で、イエスは真理をあかしするためにこの世に来られたとおっしゃった。以前にもイエスはご自身のことを真理だと宣言された(ヨハネ 14:6)。
 - b. イエスは、ご自身が王となり真理をあかしするという目的を明確にされる。イエスは神に選ばれた国を再建させるためでなく、ご自身の死と復活を通してこの地上の所有権を取り戻すために来られた。イエスは力づくではなく犠牲の愛によって治めるためにいらした。
 - c. イエスに属する者も同じようにするべきである。イエスのものとなっていれば彼の声に聞き従い犠牲の愛の中を歩めるはずである。「真理に属するものはみな、私の声に聞き従います。」
4. ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」(18:38)
 - a. ピラトは真理とは何かを考える。あなたは真理を求めたことはあるだろうか？ 私はもしピラトが正直に真理を追究したならイエスを釈放したと思う。しかし、イエスに敵対する者たちからのプレッシャーに負けて仕方なくイエスを死刑に定めるのである。
 - b. 私は、だれだもし真剣に真理を求めるのならいずれはイエスを見つけられると思う。今この時代に生きているおかげで、私たちは無限とも思われる情報をすぐに手に入れることができる。
 - c. あなたは自分のいのちをどのように使いたいだろうか？ 真理の声を聞きイエスに従うか、イエスの敵によるプレッシャーにひるんでしまうだろうか？ あなたは誰の声を聞き、誰の声に従っているだろうか？